
この世界の何処にもネバーランドなんてない

宮崎三樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この世界の何処にもネバーランドなんてない

【Nコード】

N9566Z

【作者名】

宮崎三樹

【あらすじ】

本を読み、手首を切る。

そんな砂漠のような日々。

砂漠で死んだ二人の中学生の物語。

prologue

青春なんて馬鹿みたい。

血が床に滴り落ちる。

血はフローリングの床の、少し前までピアノがあったところに小さな赤い水たまりを作り、私はカッターナイフの刃をティッシュでふいて、手首の傷を止血した。

度重なるリストカットのおかげで、止血がとても上手くなっていった。

動脈を指で押さえ、心臓よりも高い位置に手首を持ってくる。

これだけは、私がリストカットをするおかげで父が喜ぶ点かもしれない。

医者である父は、私を医学部に進学させて、診療所を継がせたいらしかった。

父親は医者として有能なのはわかるけれど、完璧なまでの合理主義者で、小説というものを無駄だと言って、それを読んでいる私を馬鹿にするつまらない人だった。

幼いころは、私がピアノで新しい曲を弾けるようになる度に喜んでくれたけれど、小学5年生のときに私に中学受験を強制してから変わってしまった。

幼く、父や先生の言うことをハイ、ハイとよく聞かいい子だった私は、医者になることを夢だと言い、父に言われるままに中学受験をし、つくば市にある私立の中高一貫校に入れられてしまったのだった。

私立と言っても、学習院とか慶応みたいな、大企業の社長令嬢みたいのがたくさんいる学校ではない。茨城の地方都市の、少しばかり生活に余裕のある人々の娘や息子が通う学校。

その学校に入ったのは失敗だった。

なんだかその学校には、嘘の空気がただよっているようだった。

先生の微笑も、クラスメイトの友情も、みんな嘘。

それらが、見かけだけの、軽薄な、心の伴わないものだど、なぜかそうだったことに敏感な私には思えた。

「あたしたち、友達だよね」

友達だと確認しなければいけない友情なんて友情じゃない。

こういうの、人間不信っていうんだろうな。

昼休みの教室で聞こえるのは、下劣な話しかない男子の上品な笑い声。ひたすら流行を追いかけている女子の甲高い笑い声。いずれも価値のない、ただのノイズ。

だから私は中学校に入って2年間、ずっと誰とも必要最小限の会話しかしなかった。

そのせいで通知表には、もっと人と話しましょう。と書かれる始末だった。

青春なんて馬鹿みたい。

青春なんて、人生に疲れてセンチメンタルになった大人の感傷でしかないんだ。

8年前に亡くなった母が始めさせてくれて、唯一の楽しみだったピアノを取り上げられて、勉強とリストカット、それだけの生活。そのどこが麗しき青春の日々なの？

そんな誰も答えてくれない問いを、心のなかで繰り返しながら、床にたまった血をふき取っていた。

貧血で頭がくらくらしていた。

貧血とわかつているのに切ってしまう自分が、馬鹿馬鹿しかった。絶望して切って、切って絶望して、そしてまた切って。その終わりなきループの始まりを、私は詳しく覚えていない。いや、あまりにも嫌な記憶だったがために、忘れたのかもしれない。

たぶん去年の十二月ごろだったと思う。

その時から積み重ねた傷跡は、もう容易には消えない。

人に見られなくなかったから、冬の間は学校指定のセーターで隠していた。

しかし、夏は目と鼻の先まで来ていた。

prologue (後書き)

年明けに次をアップします。

クリスマスの夜

その日はクリスマスイブだった。

私は英語の宿題をしていた。

机の下の足が寒い。

「かなでーッ」

父親が呼んでいる。

はい、という返事をして私はノートの上にシャーペンを置いた。リビングに行くと、明らかにいら立っている父親がいた。

怒っている理由はわかつている。

「奏、この成績はなんだ？」医者である父親は問い詰めた。

「数学は、学年で上位50位くらいじゃないとまずいんじゃないか。数学ができないと、医学部は絶対無理だ。」

そう言って父親が指し示す私の順位は100位。

確かに、私の数学の成績は下がってきている。それは火を見るより明らかだった。

もちろん、自分が勉強しなかったのが悪いのだから、まったく反論できない。

怒られるのが嫌だったら、夜遅くまで小説を読むのをやめて、ちゃんと勉強すればいい。簡単なこと。

そう、父親はいつも正しい。

正しいけど間違ってる、気がする。

端的に言えば、私が間違っているのは明らか。

しかし、父親も間違っているんじゃないだろうか。私は医者になんてなりたくないし、医者になるために勉強するなんてもっと嫌だった。

私は父親が軽蔑する文系の歴史、特に世界史が好きだった。医者と歴史学者を比べて、医者の方が偉いという保証はない。（逆も同じだけれど）したがって文系だから蔑まれる。というのはおかしい

ことだと私は思っていた。

私はそれを父親に言ったことがなかった。

人に物を伝える、ということが苦手なのだった。たとえば、それがたった一人の家族であっても。

間違いを指摘できない自分が、悔しい。とても悔しい。

私はうつむいた。

父親の視線を感じる。それは岩のように重く、ナイフのように鋭利だった。

「そうか、だまっているのか……。それなら、奏……。ピアノをやめなさい」

「えっ……」

父親は私に死ねと言った。

それと同じことだった。

なら、死んでやる。

私はうつむいたまま、自分の部屋に戻った。

涙が頬をつたっていく。

死んでやる、消えてやる。

これまで、そういう気持ちになったときはピアノを弾いていたのに、父親はそれさえ奪った。

私は、ベッドと机と、ピアノしかない地味な部屋のドアを思いっきり大きな音を出して閉め、鍵をかけて、勉強机の引き出しを開けた。

中に入っているのは黄色のカッターナイフ。

カチカチと音をさせて刃を出す。

それを頸動脈に持っていく。

冷酷な刃が首筋に触れる。

冷たい。死の冷たさだ、と思った。

さあ、手を動かせ。そうすれば……。死ねる。手が震えた。

死にたかった。

けれど……………

死ぬのは怖かった。

手からカッターナイフが滑り落ちた。

それは床に当たってカッンという硬い音を立て、私の心の弱さを証明した。

私は、数学を理解しようと努力できる我慢強さも、父親に言い返す勇氣も、死ぬ度胸さえも持ち合わせてはいなかった。

そう思うこと自体も、言い訳。

この世に神というものが存在するなら、私はそれを呪った。

床に落ちたカッターナイフを拾い上げた。

その刃は、蛍光灯の光を受けて銀色に光っていた。

カッターナイフを白い左手首に押し当て、切り裂いた。

鋭い痛みとともに、鮮やかな紅の血が流れる。

流れた血の分だけ心が軽くなった気がした。

私はその時点では、それが悪夢のはじまりであることを知らなかった。

友人

桜が散り、若葉がそれに入れ替わった。

夏は刻一刻と近づいていた。一歩ずつ、でも確実に。

暑いのを我慢しながら、私はセーターを着続けていた。

私はリストカットをやめられなかった。

私は手首を切らなければ死んでしまう。

洗濯物を干すロープ、カッターナイフ、白い風邪薬の粒。それらが私を死へと誘った。

その誘いを断るためには、切ることが必要だった。

でも、よく考えてみれば、なぜ私は死んではいけないんだろう。

家族が悲しむから？

いのちの無駄だから？

私は家族のために生きているんじゃない。

自分のために生きている。

私の人生なんだから、私の自由にさせてほしい。

なんで、生きる権利はあって、死ぬ権利はないんだろう？

苦しんで生きるなら、死んだほうがましだ。

と私は思う。

これは私の屁理屈なのかな？

もう、どうでもいい。みんな死んじゃえばいい。隕石よ、降り！

でも……そこまで思いつめても、私は死ねなかった。包丁を持つ

た手は動かさず、屋上から下を見下ろして足はすくんだ。

何故だろう。それは人生への未練なのか、死への恐れなのか。

つまらない国語の授業中、そんなことを考えていた。

昼食を食べながらも本を開くほど、小説を読んでいけば、国語の授業で先生が話すことは、つまらないことばかりだった。

そもそも、何故、太宰治の生い立ちなんかを暗記しないといけない？

作品の背景に、その作家の人生があることはわかるけど、重要なのは作家の人生ではなく文章のはず。

別に、太宰治を否定するわけじゃないけど。

先生の声はお経のように響き、私の心を滅入らせる。

授業の終わりのチャイムが鳴った。

やっと国語から解放された。

次は音楽の授業だった。

少しばかり心が軽くなる。

早めに音楽室に向かうと、どうやら早すぎたようで、誰もいなかった。

グランドピアノが寂しげだった。

私は引き寄せられるように、ピアノの前の椅子に座った。

少なくとも、ピアノを弾いている間は、悩みを忘れられるような気がした。

父親にやめると言われて、私の部屋からピアノが消えて以来、ピアノには触れていなかった。

ひやりとした鍵盤が懐かしい。

手が勝手に動き出す。

ビートルズの Hey Jude を弾いた。

ピアノ教室で習った堅苦しい曲よりも、昔の洋楽好きの、今は亡き母親のCDラックにあったビートルズの曲を勝手にアレンジして弾くほうが好きだった。

左手が和音を刻み、右手がポール・マッカートニーのボーカルの音をなぞっていく。

ぜんぜん鈍っていない。それが意外だった。

自分の指で音を創り出す快感。久しぶりに味わう感覚だった。

私の頭の中では、ポール・マッカートニーが歌っている。

伸びやかで、力強く、それでいて繊細な声だった。

ん？、頭の中？

なんか、とてもリアルな声なんだけど。
もしかして幻聴？

いや、誰かいるんだろう、後ろに。

私は振り向いた。

教科書を抱えて、驚いた、小柄な男子生徒がそこにいた。

端正な顔で、少女のような優しい眼差しの人だった。図書室で見
たことがある気がするけど、名前は知らない。

そういえば、同じクラスだったっけ？

私と同じで、あまり目立たない生徒だった。

「ピアノ、上手いんだね」

「いや、そっちこそ歌、上手いね」

本当にその人の歌は上手かった。お世辞じゃなく。

たぶん声変わりがまだなのだろうけど、私より高い、澄んだ歌声
だった。

「ありがとう、ビートルズは好き？」

「うん」私は反射的に答えた。好きじゃなかったら、学校のピアノ
でわざわざ弾くわけがない。

その人は静かに微笑んだ。

なんだか私と似通った雰囲気だった。微笑んでいるのだけれど、
どこか悲しく、影がある。

漆黒の、どこか儂げな、瞳だった。

信じていいんだ、と思った。この笑顔を、

この眼差しを。

その日からだった。私と田中敬のふしぎな友人関係が始まったの
は。

非常階段

もうすぐ定期テストだった。胃が痛い。
テスト前になると、なぜか本を読みたくなる。教科書で重い鞆は
教室に置いて、足が図書館へと向かう。

本たちが私を魔力で引つ張る。

今日も開けてしまった。図書館のドアを。

田中がドイツ文学の棚を眺めていた。

さて、今日は何を読もうか、と、英文学の棚を眺める。アガサ・
クリステイ、アン・フォート、ウィリアム・シェイクスピア、ウイ
リアム・レヤン。

そうだ、これにしよう。

アン・フォートの、

「自殺願望」

真っ黒な表紙のこの本を持って、カウンターに行き、借りた。
図書館の隅にある時計を見る。

まだバスまで時間がある。

勉強用の椅子に座って、真っ黒な表紙をめくる。
目に飛び込んでくる、文字たち。

「この本を、これから死のうとする人々に捧ぐ」
ページをめくる。

『一つ言っておきましょう。自らの手で死ぬのは悪いことではありません。』

何故、そして、どうやって死ぬかが重要なのです』

彼女から渡された便箋には、美しい文字でこう書かれていた。

彼女は私の命の恩人だった。

(普通の人の感覚では、だが)

私はロンドンの駅でホームから、列車に飛び込んだのだった。彼

女はそれを救った。

周りの人たちには、私は誤って転落したように見えたらしく、線路に誤って転落した華奢な女子学生を列車から救った、大柄な、造船会社の社長婦人の話は美談となった。

そもそも、私が飛び降りるタイミングが早すぎたのだ。列車が来るぎりぎりに飛ばせば死ねただろう。確実に、一瞬で。

私を救った婦人は、この便箋を渡してどこかへ去っていった。しまった。

この便箋の内容だと、彼女は私の自殺を知っていたということになる。

よく考えてみれば、これはいつ書かれたのだろう……。うずくまっている私を、線路の上から突き飛ばして救ってから、これを書く暇など無かったはずなのだが。

背筋が寒くなってきた。

便箋を裏返すと、なにやら小さい文字があった。

『あなたがまだ死にたいのなら、ここに来てほしい。テムズ川が見える、青い屋根のカフェの地下室。』

カフェのオーナーにこれを見せれば入れてくれるわ』
謎めいた文章だったが、私がコートを羽織ってアパートを出て、テムズ川へと向かったのは言うまでも無い。

「それ、面白い？」田中が私の向かい側に立っていた。

「面白いと思う？」そう言って私は題名を見せた。田中は苦笑した。

「ところで、数学ってどう？」私は聞いた。

「どうって？」

「できそうか、ってこと」

「まあ、数学はスフィンクスだからね」

「スフィンクス？」

「うん。数学は、腹黒い謎を抱えたスフィンクス。あるドイツの詩人が言ったんだ」

答えになっていない気もするけど、納得しておいた。

「今日、非常階段に来なよ。」

読書にびったりだから」

田中は言った。

非常階段、火事とかの時に使う階段。

ふうん、面白そう。

バスに遅れるかもしれないけれど、私は田中についていった。

車輪の下

四階の非常階段はひんやりと涼しかった。

田中は、念入りに周りを見回して重いドアを閉めると、階段に座って、本を読み始めた。

確かにここは読書には最適の場所だった。

涼しくて、適度に明るくて、静か。

非常階段の下は学校の駐車場のようだった。

「それ、どういう小説？」私は聞いた。

「ああ、これ？これはね、車輪の下っていう小説で、主人公のハンスは秀才で周りから期待されて神学校に入るんだけど、厳しい先生たちのせいで精神を患って、結局、故郷に帰って自殺みたいなかたちで死んでしまう。そんな話だよ」

なんだか私と似ている気がした。

私立の中高一貫校に入れられて、リストカットして……その先はまだわからないけど、

この小説と同じ結末になるような気がした。

「ふうん、私みたいだね。その主人公」

「僕も、自分みたいだと思った」

そう田中は言った。妙に悲しげな言い方だった。

「死にたいと思ったことってある？」私は聞いた。なぜ聞いたかのかは自分でもわからない。強いて言うとならば、仲間がほしかったのかもしれない。

沈黙。

非常階段を吹く風の音だけが聞こえる。

スカートの布地を通して、階段の床の冷たさが伝わってくる。

手首の傷が疼く。

今、中学・高校時代を私立の女子校で過ごしたという担任の教師に目撃されたらどうなるだろう。と私は考えた。おそらく勘違いし

て私を田中から引き離すに違いない。

そう思われても仕方ないほど、私と田中は近くに座っていた。田中は気にしていないみたいだったけれど。

田中は閉じた本を見つめていた。

その表紙にはヨーロッパの教会のステンドグラスが描かれていた。十字架が中央に描かれ、そのまわりを人が囲んでいた。

風がゆつくりと吹き抜けていった。

「……あるよ」

聞き取れないくらい小さな、風にかき消されそうな声で田中は答えた。

顔を上げて田中を見ると、泣いていた。

体の奥からしぼりだすような泣き方だった。

小柄な体を震わせて、泣いていた。

涙が頬を、熱い溶岩のようにゆつくりとつたつたって行った。

なんで？とは聞けなかった。聞くのは残酷すぎるように思われた。

「変なこと聞いて、ごめん」

「うん……」

田中はハンカチで目を拭いた。

私はそのハンカチを持った手を忘れない。

その細い手首には私と同じ、あれがあった。

田中を抱きしめた。

田中は体を一瞬強張らせたが、拒みはしなかった。

言葉はもう要らなかった。

涙があふれてくる。

次から次へと、とめどなく。

田中も私の背中に手を回した。

このまま時が止まればいい。そう思った。

急に眠くなってきた。

目を開けているのが辛い。

昨夜、1時まで小説を読んでいたツケが今になってまわってきた。

私は、田中の腕に抱かれたまま、不意に眠りにおちてしまった。

帰宅

足が寒かった。

床は冷たかった。

私は目を覚ました。

空には星が光っていた。

自分の置かれている状況がわかってくると、自分の体に、誰かのブレザーがかけられているのに気がついた。

目をこらして名前を見ると、田中敬とあった。

襟の部分が冷たく、涙で濡れていた。

8年前に亡くなった母親の形見の腕時計を見ると8時だった。

この時間ではスクールバスはもうない。

急に不安になった。

鍵がかかっているだろうから、教室に荷物を取りには行けない。
どうしよう。

家までは20キロはある。

しかも一文無し。

職員室に残っている先生に電話を借りようか？

いや、そんなことしたらこの時間まで学校にいたことがばれる。

それとも20キロの道のりを歩いて帰る？

どちらにしろ、この時間に帰ったら父親に叱られるのは目に見えている。

途方に暮れてうずくまっていると、田中のブレザーのポケットの中に、何か物があるのに気がついた。

ポケットに手を入れてみると、革の財布だった。開けてみると、

中にはペンで書かれたメモと千円札が入っていた。

清水さんへ

揺さぶってみても寝言を言っただけで起きないので放っておき

ました。

財布の中の千円札で帰ってください。

抱きしめてくれてありがとう、少し元気が出ました。

あと、泣き顔を見せてごめんなさい。

田中敬

不思議な気分だった。

普通、書く？こんなこと。

泣き顔を見せてごめんなさい。なんて。思わず笑ってしまった。

抱きしめてくれてありがとう、か。そう言ってもらえて、こつち

こそ元気が出た。

私はメモを畳んでポケットに戻し、家までの帰る方法を考え始めた。

市営のバスで家の近くまで行って、そこから歩いて家に帰る。

私は黒い本と田中のブレザーを持って、立ち上がって階段を降りていった。

バスから降りると寒かったので、田中のブレザーを着た。着ることに抵抗はなかった。

サイズはぴったりだった。

涙はもう乾いていた。

住宅街の中の私の家が見えてきた。

ブレザーの内ポケットに入っている財布が歩くたびに、規則正しく揺れた。

玄関のドアを開ける。

「ただいま」

そう言って返ってきたのは父親の、おかえり、という声ではなかった。

「こんな遅い時間まで何してたんだ！」

リビングに足を踏み入れた瞬間にそう言われた。

「ちよつとバスで居眠りしちゃって」

「嘘だな。父さん、今日、父母会の集まりがあつて、学校に行つたんだ。そのとき、駐車場から見えたんだが、お前、男と一緒に非常階段にいなかったか？」

え……。

ばれた。担任よりもはるかに面倒な相手に。

「別に、あの人とは付き合っているわけでもなんでもないんだけど」「そうじゃない。お前はまだ中学生なんだから……」

そんなにうるさく言つんだつたら、女子校にでも入れればよかったのに。

「私のことなんだからどうでもいいじゃん、ほつとしてよ」

私はあなたの所有物ではないのです。

私はそう心の中で反論した。口には出せなかった。

「とにかく、もっと早く帰ってきなさい」
やだ！

そう叫びたかった。

幼い頃なら、躊躇わずにそうしていた。

しかし私はもう中学生で、まだ中学生。

叫びはしなかったけど、叫びたい衝動を完全に押さえ込めるほど大人ではない。

「……やだ」

そう呟いたのがせめてもの反抗。

「いやでもなんでも、子供はこの時間には帰ってくるものなんだ」
子供、という言葉が私の胸に突き刺さる。

唇を噛む。血の味が口の中に広がる。

私は大きな音を立てて自分の部屋のドアを閉めた。

飲みかけの紅茶と、文庫本の山が置いてある机の引き出しを開け

る。

いつも通りだった。父親に叱られて、反論できずに自分の部屋に逃げ込み、手首を切る。

カッターナイフの刃が蛍光灯の光を反射する。

今日もまた、血は重力に逆らわずに床へと落ちて、赤い水溜りを作った。

頭がくらくらしてくる。

血をティッシュでふいた。

制服のまま、ベッドに寝転がる。

涙がシーツを濡らす。

首が絞められるかのように、苦しい。

喉の奥から嗚咽がもれる。

体の力が抜けていった。

まぶたが重くなってくる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9566z/>

この世界の何処にもネバーランドなんてない

2012年1月14日01時48分発行